



大林宣彦監督
最新作でヒロイン

吉田 玲さん

中学2年生で出演した自主映画『隣人のゆくえ』が大林監督の目に留まり、最新作『海辺の映画館—キネマの玉手箱』で主役の1人を演じた梅光学院高3年生の吉田玲さんをご紹介します。



▲劇団ZingZing「あんず」のワンシーン

「演じるんじゃない、役を生きるんだよ」
その言葉を胸に。

ミュージカル一色の毎日

下関で生まれ育った吉田さんは5歳の時、劇団ZingZingのミュージカル公演を観て「これだ!」と思い、入団しました。「まるで大きな家族」のような劇団で、代表の福田えい子さんと出会います。「歌やダンスだけではなく、人との接し方も学びました。尊敬しています」と笑顔で話す吉田さん。

最初に訪れた転機は、向井小6年生の時。同劇団の公演「チャイナタウン物語」の主役で、プレッシャーを乗り越えた時に、それまでにない達成感を味わいました。その後、ミュージカル部に入ると

め、梅光学院中学校に進学。ダンス&ボーカルも習い、大好きなミュージカル一色の時間を積み重ねていきます。

そして、中学2年生の時、下関で映像制作を続ける柴口勲監督の自主映画『隣人のゆくえ』あの夏の歌声に出演。「私の個性に寄せた明るくてのんびりした役は、とてもやりやすかった」と振り返るこの作品が、後の転機のきっかけとなります。

出会いに恵まれて

「出会わなければ、今の私はなかった」という存在の福田先生。13年間、共にミュージカルを続けてきた「大切な存在」の幼なじみ。映画の楽しさを教えてくれた柴口監督。「出会いに恵まれています」という吉田さんに、新たな出会いが訪れます。それは、大林宣彦監督との出会いです。

『隣人のゆくえ』を「奇跡のような

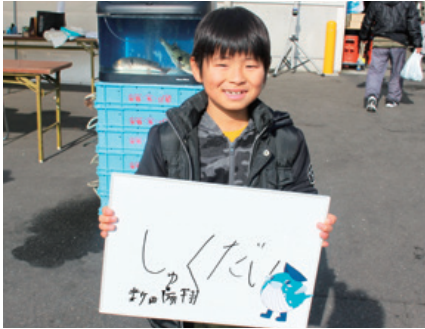
▶デビュー作『海辺の映画館—キネマの玉手箱』の台本イラスト：浅田弘幸





まちかどボイス

今月のテーマ
令和2年に頑張ること



◀『海辺の映画館ーキネマの玉手箱』©2020『海辺の映画館ーキネマの玉手箱』製作委員会/PSC、配給アスミック・エース



▶梅光学院中学2年生の時に出演した自主映画『隣人のゆくえ』のワンシーン(中央が吉田さん)。3月8日、田中絹代ぶんか館で上映予定。(11頁参照)

映画」と評した大林監督の作品『海辺の映画館ーキネマの玉手箱』の主役の1人に抜てきされた吉田さん。現場でたびたび変わる台詞や状況、セツトもない場所での演技など、初めて触れるプロの世界の厳しさに、緊張と戸惑いの日々を過ごします。

そんな吉田さんに、ある日、大林監督は「演じるんじゃなくて、役を生きるんだよ」と伝えます。監督の映画人として作品にかける思いを素直に受け止めた吉田さんは、その後、1カ月半に及ぶ撮影を「不思議な感じでしたが、フレンドリーな現場で楽しい日々でした」と振り返ります。

そして、クラクアアップの日。大林監督から「未来の平和は、君た

ちに任せたら」と言われ、「戦争を伝えていく作品に携わることは戦争を知らない私の使命」とためらうことなく思ったそうです。

完成した作品を観たのは、昨年11月の広島国際映画祭。「これまで観たどの映画とも違い、どっしりとした存在感で衝撃的でした。その後の舞台あいさつでは、感動で震えが止まらず、声を発することができませんでした」と話す吉田さん。

今回、取材を行った田中絹代ぶんか館の田中絹代賞受賞者コーナーで「下関人として、いつかこの賞を受けます」と、よく通る魅力的な声で宣言してくれました。

編集後記

■安くなると言われ、プロバイダを変更しましたが、安くならなかった苦い経験があります。取材後、すぐに携帯の電話帳に188を登録しました。(き)
■身近にある全国的にも世界的にも素晴らしいペンギン村！ 私たち下関市民は恵まれているとしみじみ思いました。毎日見ても飽きません。(ひ)
■私も老眼が進みつつありますが、市報では読みやすいとされるユニバーサルデザインフォントを使用しています。編集作業に老眼鏡はまだ不要!?(わ)